

## 教育心理学教室教官の研究状況報告

### この1年の歩み（昭和55年から56年にかけて）

村 上 英 治

1) 「完全参加と平等」をスローガンとして今年、国際障害者年を迎えた。学研刊行「実践障害児教育」91号（56年1月刊）冒頭に、田村一二氏との対談は、「私の好きな教師——体験的教師論——」と題して、障害児教師のあるべきすがたを模索することから、この年の幕あけは始められたとあってよい。田村さんの人となり躍如たるもので、たのしい一夕であった。これを皮切りに何かと忙しいこの1年が展開されていく。昨年にひきつづき、今年愛知県教育センターのプロジェクトは、第3年次を迎えたが、今年の活動は、昨年度のまとめ、12の事例研究から成る「心身障害児の就学指導に関する研究（第二次報告）」からの展開である。障害児にとって、ほんとうにその子にふさわしい適切な就学指導がすすめられるようになることを心から期待したい。

2) 臨床棟での重度発達遅滞幼児に対する母子通所形態の集団療育は、今年第11年目を迎えた。障害重い子どもたちにも、かなりの施策がすすめられるようになってきたとはいうものの、まだまだ問題は山積みしている。今年また新しい仲間をも加えての療育がすすめられると共に、これまで10年をふりかえって名簿を整理しなおし、これにもとづいて今まで参加してきた、当初以来の親、療育者に、それぞれの参加の意義を再検討したものをまとめ、東海心理学会第30回大会（56年6月）で口頭発表を行った。本紀要にも「発達障害幼児集団療育活動の再検討——親・療育者への調査をとおして——」と題してその成果がまとめられている。なおこの調査には東海学術奨励金からの援助が得られたことを付記しておく。

3) 精神病院臨床の場合では、この1年間に特に業績として残されるものはなかったが、多年にわたり、私自身も指摘してきた、病院における心理検査の評価のみなおしが、なおいろいろ問題はあるにしろ、今年6月の医療保険点検の改定にともなって改善される兆しを示したのは、今後の臨床活動に有形無形の影響を及ぼすものと思われる。日文刊「心理測定ジャーナル」、〈テスト随想〉に所感の一端を寄せた所以である。

病院臨床家の実践の場合は決して検査・診断の段階にとどまるべきでなく、治療的接近の上でも、また対象として家族・地域への拡がりという点でも、広範囲な活動を

含むものであることを実証的に提示すべく、誠信書房の高配を得て、池田博和・渡辺雄三両君との共編で、「病院心理臨床（仮題）」をまとめるべく今作業中である。

4) 昭和54年、55年と両年度にわたり、ひきつづいて援助の得られた科学研究費「名大式技法における〈思考—言語カテゴリー〉の再検討」は、一応56年3月に形式的に終結にいたったが、具体的なカテゴリー再検討のためには、なお成すべき多くのものが残っている。土川隆史・池田博和両君との協同の仕事として、今少し検討を重ねていくつもりでいる。

5) 学生相談臨床活動としては、このところより一層、エンカウンター・グループに心惹かれるものがある。55年7月には、教官エンカウンターの第6回目が箱根で開かれ、改めて心開かれるものがあったし、名古屋大学の学生を対象としての4回目のグループは、例年同様厚生補導特別企画の援助にもとづいて、一昨年秋竣工した中津川共同研修センターにおいて、55年10月施行された。若い学生諸君の純粋な、人間を問いかける視座にまた、その年ごとに心ゆさぶられるものがある。その報告は、今年3月「昭和55年度厚生補導特別企画・第4回自己再発見のための合宿セミナー」（名古屋大学学生相談室刊）にくわしい。

学生相談室長として、ここ4年間その職責をけがしてきた。この4月、一応その職を退いたが、日常の学生相談活動には、これまで以上に微力をつくしたいと考えている。

恒例1月の全国学生相談研究会議は第14回を迎え、56年、雪ふりしきる九州福岡で行なわれた。「入学直後の諸問題」と題するフォーラムで司会をつとめ、全国各地の大学における同僚諸君の学生相談活動に関する情熱に改めて心うたれたことも、今なお忘れがたい。詳しくは、九州大学刊行の報告書に示されている。

なお、グループ・アプローチのこれまでの歩みは、佐治守夫（東京大学）、福井康之（愛媛大学）両教授と私との共編で、前著「グループ・アプローチ」をうけつぎ、「グループ・アプローチの展開」として、おくれればせながら、この56年6月、誠信書房から上梓されている。

6) 54年10月の名古屋での催しをきっかけに、「心理臨

床家の集い」に対するニードは、ひろく全国的に高まってきた。昨年10月には、名古屋にひきついで、「'80年CPの集い」が八王寺のセミナー・ハウスで、全員合宿形態で設けられた。症例研究の1つの司会を、この場でもひきうけたのであるが、このような積み重ねをとおして、若い臨床家の育つことをまた期待してやまないものがある。

7) 今年6月、東海心理学会は第30回記念大会を、愛知厚生年金会館で開催する運びに到った。依田新教授が、

その礎を築かれて以来の30年の歩みである。この記念レクチャー・フォーラムでは、「明日の心理学に期待する」と題して、本学会の発展に寄与いただいた大先輩の先生がたからの提言を受けることになったが、このフォーラムを司会して、後学として、それらの提言にいかにかたえるべきか、その責務の重さを自らに問いかけながら、当東海地区の、また日本の心理学のさらなる発達を心から祈念した次第である。

(昭和56年7月29日)

## 研究経過報告—昭和55年度

田 畑 治

1. カウンセリング過程の研究 — 昨春秋シカゴ大学のジェンドリン博士が日本心理学会の招きで来日し特別講演した。又その後の研修会で「フォーカシング技法」の手ほどきを受けえたことにより、名古屋地区でも、教養部伊藤義美助手らとともに研究会をもちつづけてきた。そこでの成果を「カウンセリング過程へのフォーカシング技法の適用(Ⅲ)」(日心第44回大会, 55. 8, 北大)と題して発表することができた。そしてさらに、この技法の重要性を再確認することができた。また依頼によってであるが、「カウンセリングにおける“思いやり”」(『児童心理』第34巻12号)でカウンセリングにおけるイメージの問題、カウンセラーの態度条件、「思いやり」— ①「同情的理解」と「共感的理解」、②「尽力的顧慮」と「垂範的顧慮」(ハイデッガー, H., ポス, M. ら) — の差異を論じた。

「ミニ試行カウンセリングについて」(東海相談学会第13回大会, 56. 3)では、学部卒業後のカウンセリング学習の基礎訓練の意義についてふれ、やり方のユニークさ、具体的なケース研究を発表した。全体のデータについては、目下整理中であり、次年度に持ち越されることになった。実験に参加し協力してくれた被験者の追跡的研究も必要であり、いましばらく、積極的に時間をかけてみつめていく必要があると考えている。

2. 心理臨床家の養成、教育・訓練問題について。  
1980年度「心理臨床家の集い」が秋たけなわの東京・八王子セミナーハウスで10月10, 11日に開かれた。この集いは症例検討会と討論会とが中心の研究集会であるが、臨床心理学専攻の大学院レベルでの教育・訓練のモデルとして、今後も筆者の中で重要であると考えている。筆者自身、九大大学院出身のホープ遠矢尋樹氏の「登校拒否の訪問面接事例」発表のコメンターとなり、氏の精力

的な取り組み、思春期症例での治療関係の構造化などにコメントできる機会を得た。スーパーヴィジョンの意義についても、さらに学ぶことができた。わが国の第一線の心理臨床家の集いとして、今後とも発展させていきたいものと考えている。

3. 臨床青年心理学への接近。 当学部の池田博和助手らと共同研究をはじめ、すでに4年目に入っている。隔週に開く青年期ケース研究会での共同討議をもとに、研究紀要にまとめることも定着してきた。今年度は、「思春期登校拒否と働くことの意義をめぐって」(東海相談学会第12回大会, 55. 3; 研究紀要第27巻, 55.12)を、伊藤義美助手とまとめた。挫折から自立をたどる過程で、かかる青年が“中間地帯”としてアルバイト先での人間関係をうまく確立し、心身ともに充実した体験学習をすることの意義を論じたのである。われわれは、これを学部での特定研究「教育60年代研究」の視野の中にも位置づけている。

4. グループ・アプローチ、エンカウンター・グループの実践研究。ここ4年間、毎年秋に本学学生相談室主催の自己発見のための合宿セミナーが学外の合宿所で行われてきた。55年度も、文部省の厚生補導特別企画の援助を得て行われた。この報告は、「昭和55年度厚生補導特別企画・第4回自己発見のための合宿セミナー」(名大学生相談室, 56. 3)に集録されている。

また第14回全国学生相談研究会議が正月明けの珍しく大雪降る博多で開かれたことも耳新しい。シンポジウム「厚生補導を問う」で治療心理学の立場から発題することができた。これは、「学生相談九州シンポジウム(昭和55年度厚生補導特別企画)報告書」(九州大学健康科学センター, 56. 3)に所収されている。

なお、目下筆者はエンカウンター・グループの実践フィー